

## 下御霊（しもごりょう）さん

京都では、上御霊神社と下御霊神社を上御霊（かみごりょう）さんとか下御霊（しもごりょう）さんと呼ぶ。その上御霊神社と下御霊神社についてであるが、863年（貞観5年）、神泉苑で執り行われた御霊会と連動するような形で上御霊神社と下御霊神社が創建された。

上御霊神社も下御霊神社も創建の年代は明らかではないが、両神社とも、[神泉苑](#)での「御霊会」（863年）とタイミングを合わせて創建されたようだ。両神社とも、中世以来朝廷と貴族の崇敬が厚く、上御霊神社に対しては、近世には毎年正月に御所から歯固めの初穂の寄進があり、天正、宝永、享保、宝暦などの社殿修造に際しては宮中の内侍所（ないしどころ）が寄進された。また、下御霊神社に対しても、霊元天皇はことに信仰厚く、享保8年と14年の二度にわたっての行幸祈願があった。その後、上御霊神社は、光格、仁孝、光明天皇の代には皇子や皇女の誕生に際し胞衣（えな）を神楽所の前に奉納されるなど、御所の産土神（うぶすながみ）としての特別の待遇を受けた。武家もこれにならい朱印地19石を寄進したことがある。

すなわち、上御霊神社と下御霊神社は、朝廷や貴族と直結した格式の高い神社である。そればかりではない。御霊信仰というものを理解する上で上御霊神社と下御霊神社はなくてはならない存在であり、私は、これからの日本の歩むべき道を考えた時、上御霊神社と下御霊神社の祭りがもっと盛んにならなければならないと思う。

神社の縄張りを氏子地域という。かつて私の住んでいた梅屋学区も氏子地域だということもあり、上述の説明と多少ダブルところもあるが、「下御霊さん」のより詳しい説明をしておきたい。下御霊神社の公式ホームページには次のようなことが書かれている。すなわち、

『平安時代は貴族文化が隆盛した時代である事は皆様よくご存知だと思いますが、一方で災害や疫病の流行が繰り返した不安な時代でもありました。医術や科学が未発達時代において次々に起こる災いになすすべがなく、官民を問わずその恐怖に畏れおののいた事でしょう。当時の人々はその原因を「貴人の怨霊」がもたらすものと考え、御霊（ごりょう）としてお祀りをしお慰め申し上げることにより、災禍からお守りいただくよう御霊会（ごりょうえ）を行うようになりました。初めは京の郊外でそれぞれの御霊が祀られ

ていましたが、後にまとめて八所御霊としてお祀りする事で神徳が高まると考えられ当社が鎮座されたものと思われます。「貴人の怨霊」とは政治抗争の中で冤罪を被り非業の死を遂げられた方々でございます。』

『 疫病とは新型インフルエンザの・天然痘・赤痢などのことで、医学が未発達であった当時多くの方が亡くなりました。さらには平安京は日本最大の都市であったが故に感染の威力も凄まじく全くなすべが無かったであります。それだけに人々は恐れおののき、切なる願いから御霊信仰が広まっていったと考えられます。

朝廷もこの事態を受けて官主導の盛大な御霊会を催したのであります。神泉苑を一般に開放することは誠に特別なことあります。こののち祇園御霊会、紫野御霊会など盛んに行われていきます。』

『 当社は神泉苑御霊会に祀られた六座に二座加えた八座をお祀りしており八所御霊と申します。鎮座された年について雑誌などで間違っておりますが、本当の所は全く不明でありまして、おそらくこの頃祀られたと考えられます。初め愛宕郡出雲郷の下出雲寺(のちに廃絶)の境内に鎮座されたと伝わっております。今で申しますと寺町今出川の北辺りと考えられます。後に新町出水の西に移り天正18年(1590)に現在地に鎮座されました。』

『 古来、皇居の産土神(うぶすながみ)としての崇敬が厚く、霊元天皇は修学院御幸の途中、享保八年と十三年の二度にわたって輦(れん)を社頭に寄せて御祈願あらせられました。また各御代を通じて大小となく宮中に行事があるか又は当社の祭事にはその都度、代参、祈祷、湯立、神楽の奉納などがおこなわれました。なお神社における神事、遷座、修理等に当っては、必ず白銀の寄附がありました。又宮さまの参拝が絶えずあらせられました。』

『 明治維新以降では、明治十年、明治天皇が京都に来られた折、勅使として堀川侍従を参向せしめて幣帛料(へいはくりょう)を賜り、そのあと特に永世保存のため金七百円を下賜あらせられました。また有栖川宮、閑院宮、久邇宮、賀陽宮、北白川宮を始め、皇族の参拝は度々あらせられました。さらに、本殿などの修理事業に対して、高松宮、閑院宮、賀陽宮より下賜金がありました。』

『 江戸時代初期の「京童」に「**下御霊 神は人のうやまふにより威をまし 人は神の徳によりて 運をそふ かたじけなくも此の御神は やんごとなき御かたも あまた御氏子にもたせおはします**」とありますように御所及び皇族の御殿(ごてん)並びに多くの公卿の邸宅が氏子地域にありました。』・・・と。

上の説明では、「当社は神泉苑御霊会に祀られた六座に二座加えた八座をお祀りしており八所御霊と申します」とあるが、まず神泉苑御霊会で祀られた六座とは、崇道天皇、伊予親王、伊予親王の母藤原吉子、藤原仲成、橘逸勢、文室宮田麻呂の六所御霊である。追加された二座とは **火雷神** と **吉備聖霊** のことであるが、この火雷神 と 吉備聖霊 というのが問題で、火雷神 を菅原道真と解釈したり、吉備聖霊を吉備真備と解釈したりする向きが多い。下御霊神社側では、火雷神と吉備聖霊を六所御霊の荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）と解釈しているようだ。私は、神社側の解釈がやはり適当であると思う。そして、広く流布されている解釈は間違っていないが未熟な解釈であると思っている。

追加された時期はずっと後年のこととしても、なぜ菅原道真と吉備真備の二人が神として登場してくるのか不思議ではないか。皆さんもその点を考えてみてほしい。菅原道真が御霊でなく神として扱われるのは、世間に天神信仰が定着してからのことと考えれば、菅原道真が御霊でなく神として扱われている理由も判らない訳ではない。しかし、吉備真備が神として世間に流布している気配はまったくないので、これは不思議というよりほかはない。したがって、火雷神と吉備聖霊を六所御霊の荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）と解釈するのが良いのではなかろうか。

御霊（ごりょう）というのは、怨霊（おんりょう）が祀られたものであり、まだ神になりきっていない霊的存在。つまり、怨霊と神の中間的存在と言っていいのではないか。すなわち、御霊というのは、荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）の両義性を持った存在と考えるべきかもしれない。そうだとすれば、六所御霊の象徴として荒魂（あらたま）と和魂（にぎたま）を祀り、荒魂（あらたま）には「呪力」を用い、和魂（にぎたま）には「祈り」を捧げたのではなかろうか。荒魂（あらたま）とは菅原道真がまだ怨霊であり火雷神と同一視されていた時の霊的存在を意味し、和魂（にぎたま）とは桓武天皇が尊崇した吉備真備の靈魂のことではなかろうか。桓武天皇は、延暦3年（784年）の詔（みことのみこと）の中で天皇のために働いた吉備真備を絶賛したと言われている。その詔（みことのみこと）を思い起こして上御霊神社と下御霊神社の和魂（にぎたま）として祀られた可能性は大きいと思う。

神泉苑の御霊会（ごりょうえ）が行われてからしばらくの間、朝廷主催の御霊会が引き続き行われたようであるが、八坂神社の御霊会や今宮神社などの民間の御霊会が盛んになるにつれて、朝廷主催の御霊会は次第に行われなくなっていった。下御霊神社の場合は、朝廷や貴族のある程度の支えはあったとしても、八坂神社の御霊会や今宮神社などの民間の御霊会に比べれば、寂しいものであったに違いない。下御霊の御霊会は、現在、還幸祭として引き継がれている。もちろん、八坂神社の御霊会、つまり祇園祭ほどは盛んではないけれど、下御霊神社は御霊会、その本質を見ることのできる神社であり、現在祀られて

いる八座の祭神と現在行われている還幸祭（かんこうさい）の持つ歴史的意義は非常に大きいものがあると思う。

私たちは、崇道天皇、伊予親王、伊予親王の母藤原吉子、藤原仲成、橘逸勢、文室宮田麻呂ならびに追加された火雷天神と吉備聖霊を深く知ると同時に、還幸祭（かんこうさい）の中身を深く知ることによって、御霊信仰の本質を認識できるのではなかろうか。私は、御霊信仰の本質は、天皇の権威の文化化であると考えており、それを感じることでできる神社は、八坂神社や今宮神社というより、むしろ上御霊神社や下御霊神社であると思う次第である。

「下御霊さん」の還幸祭（かんこうさい）は、何故か私の記憶がなく、今まで戦後の混乱のために中断されていたと思い込んでいたが、宮司さんに聞くと、還幸祭（かんこうさい）は古来欠かすことなく行われてきたそうである。戦後も。

神社の縄張りを氏子地域という。大学を卒業するまで私の住んでいた梅屋学区も氏子地域に入っているが、私の友達で下御霊さんの話をしてきた人はいない。だから、当時、下御霊さんの氏子はそれほど多くはなかったのかもしれない。今、下御霊さんの氏子になっている世帯数は、6000世帯ぐらいらしいが、こんなに少ないと神社の維持管理も大変だろう。崇敬会はないのか聞いて見たら、崇敬会はまだない。残念なことである。

これから、現在行われている還幸祭（かんこうさい）の様子をご紹介したいが、その前にまず、下御霊（しもごりょう）さんの位置と氏子地域の説明をしておきたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/simogoyou.html>

まず上の地図を開いていただき、それを見ながら、是非、以下の説明を読んで欲しい。

私が住んでいたところは堀川丸太町付近。その丸太町通は京都御所の南を通っている。御所の東側の通りを寺町通というが、その交差点付近に下御霊神社がある。正確に言うと、「寺町通り丸太町下がる」である。ご確認ください。

寺町通を御所にそって少し北に歩くと、10分ぐらいのところに「廬山寺（ろざんじ）」があるので、下御霊神社にご参拝の折には是非お寄りください。[「廬山寺（ろざんじ）」](#)は天皇が自らお刷りになった「角大師（つのだいし）」という珍しいお札が貰えます。



また、紫式部が「源氏物語」を書いた書院やすばらしい庭を拝観できます。「廬山寺（ろざんじ）」は私のお薦めの場所です。

その途中に京都市の歴史資料館があるので、そこにも是非お寄りください。[京都市歴史資料館](#)は、京都の歴史、祭礼、風物などさまざまな事柄を映像化したビデオをお楽しみいただけます。

また、マニヤックな方には、京都御所の中、南西端にある巖島神社が良いでしょう。ここは下御霊神社から歩いて20分ぐらいのところ。 [京都御所の巖島神社](#)というのは、平清盛の勧請になる神社で、小さな神社ですが面白い「弁天さん」の額が見られます。

また、そこからすぐのところ「烏丸通下立売下がる（からすまどおりしもだちゅうりさがる）」には、菅原道真の生誕地として創建された「[菅原院天満宮神社](#)」があります。この神社は癘封じのご利益があるそうです。

では、下御霊神社の還幸祭（かんこうさい）をご紹介します。





下御霊神社 氏子総代会 下御霊神社神輿会

# 下御霊神社還幸祭

神幸列・神輿巡行コース・時間 平成24年5月20日(日)  
(時間は道路事情により多少変更することがあります。)

午前10時 神幸列 出発  
 午前11時30分 神輿 (高天決行)  
 5月19日(土)午後7時 宵宮  
 (下御霊神社 寺町二条)  
 十二灯  
 子供みこし

下御霊神社  
 10:00 出社  
 13:00 入社  
 14:00 出社  
 17:10 入社  
 11:30 出社  
 17:10 入社

**道順**

--->--- 神幸列  
 —>— 神輿

**時間**

00:00 神幸列  
 00:00 神輿

下 氏子 御霊 靈 神代 社会  
 下 御 靈 神 社 神 輿 会











では、最後に下御霊神社「還幸祭」のYouTubeをご覧ください！

<https://www.youtube.com/watch?v=v3BbveY8lks>